

五、くりかへし符号は、同一の語の中で用ひることを原則とし、次のごとき場合にはかなを重ねて書く。

- (一) 話したために 読んだだけで
- それとともに さうしたもののみ
- そのうち いままで
- 行つただらう すべてです

- (二) 香川県 かがはけん 馬場氏 ばばし 平の知盛 たいち ともり
- (三) パパ ママ チチハル

〔付記〕 右の原則によつて、例へば「立てて」を「立てゝ」と書くのはよくないといふ人もあるが、しかし「この」立てて「などは、一方から見れば「立つ」と「て」との二つの単位から成つてゐるものであるが、一方から見れば「立てて」で成つて一つの単位を成すものであるから、やはり同一語中の用例であるといふことができる。ゆゑに「立てゝ」の類の書き方も認められる。

しぎに、口葺の文書において使用率の高い「いゝ」「ものゝ」「町々会」などの書き方も、これを許容的に認めておくことが現代一般の慣用に照らしておだやかであらう。

六、くりかへし符号はテン（読点）を入れてゝは用ひない。例へば

「いゝいゝいゝ。」「と、おやどりがよぶ。」
 「と、鳴く小鳥の声、」
 「いゝいゝいゝといふ波の音、」
 「いゝいゝいゝといふ葉すねの音がして、」
 「めいゝ、鬼、鬼。」

一歩、一歩、力強く大地をふみしめてゆく。

〔付記〕 くりかへし符号の適用は、右のごとく一種の修辭的用字法、すなはち文のリズムを表現するものである。

呼び名	符号	準 則	用 例
(1) 一 つ点	ゝ	<p>「一、一、一」は、その上のかな一字の全字形（濁点をふくむ）を代表する。ゆゑに、熟語になつてゐる場合には濁点をうつが（例2）、濁音のかなを代表する場合にはうたない（例3）。</p> <p>「いゝいゝいゝ」「いゝいゝいゝ」など熟語にしてゐる場合には、その「ゝ」をかなに書き改める（例4）。</p> <p>〔備考〕「はゝ」をなひに簡略にしたものである。</p>	<p>(1) ちゝ はゝ</p> <p>(2) たゞ ほゞ</p> <p>(3) ぢゝ ばゝ</p> <p>(4) づつ 小包 <small>こつぷみ</small> 眞心 <small>まごころ</small> 案内がかり</p> <p>気がかり くまねね</p>

(2) くの字点	(3) 同の字点	(4) 二の字点
く	々	々々
<p>一、「く」は、二字以上のかな、またはかな交り語句を代表する(例12345)。</p> <p>〔備考〕「く」は「ん」「ん」「ん」を経て「く」となったものである。</p>	<p>一、「々」は漢字一字を代表する(例12345)。</p> <p>〔備考〕「々」は「全」の字から転化したものと考へられてゐる。</p>	<p>一、「々」は、手写では「々」と同値に用ひられるが(例1)活字印刷では「々」の方が用ひられる(例2)。</p> <p>二、活字印刷で用ひる「々」は「々」の別体であるが、その働きは、上の一字を重ねて訓よみにすべきことを示すものである(例34)。</p> <p>三、唯「は」は書かない(例5)。</p> <p>四、「各」の「諸」の「は」がなくても読みつるが(例6)、「普通には」をつける(例8)。</p> <p>五、「々」は「々」で代用される(例910)。</p> <p>殊に「多々益々」「はかならず」「々々」を書く。</p> <p>〔備考〕「は」「は」「の」草書体から転化したものと考へられてゐる。</p> <p>それを小さくして右に片寄せたものが即ち「々」である。</p> <p>〔付記〕例3456789の類の語は、なるべくかなで書く方がよい。</p>
<p>(1) いよく ますく</p> <p>(2) しみぐ それぐ</p> <p>(3) しげく しばく</p> <p>(4) ばらく ころく</p> <p>(5) 一つく 思ひく 散りぐ</p> <p>代るぐ 知らずく</p> <p>くり返しく</p> <p>ひらりく エッサッサく</p>	<p>(1) 世々 個々 日々</p> <p>(2) 我々 近々 近々</p> <p>(3) 正々 堂々 年々 歳々</p> <p>(4) 一步々々 賛成々々</p> <p>(5) 双葉山々々々</p>	<p>(1) 草々</p> <p>(2) 草々</p> <p>(3) 稍々 や々 略々 ほ々</p> <p>(4) 愈々 いよく 各々 おのく</p> <p>旁々 かなかたぐ 交々 こもぐ</p> <p>屢々 しばく 抑々 そもぐ</p> <p>偶々 たまぐ 熟々 つらぐ</p> <p>熟々 つくぐ 益々 ますく</p> <p>(5) 唯々 たゞ</p> <p>(6) 各々 おのく の意見</p> <p>(7) 諸々 もろく の国</p> <p>(8) 各々 おのく 意見を持ち寄つて</p> <p>(9) 各々 おのく</p> <p>(10) 益々 ますく</p> <p>多々 益々</p>

(5)
ノ
ノ
点

〃

「、」〃」は簿記にも文章にも用ひる
(例12)。
〔備考〕「、」は外国語で用ひられる「、」
から転化したものであり、その意味はイ
タリア語の *comma* 即ち「同上」といふこ
とである。なほ国によつて「、」の形を
用ひる。

(1)

月	日	円	備 考
1	25	1000	
〃	〃	2500	
〃	〃	1235	
〃	26	1000	
2	1	1500	
〃	〃	1000	

(2)

甲案を可とするもの	一二八
乙案	三一九
丙案	二六五